



秋葉  
 細木金石譜  
 後編

遠  
 980  
 9





遠人 13  
號 980  
卷 9

本清



彈後編卷之九

二遍伏紐結往事終

浪速

山田山原子戲編

洛鏡 治清包が妻維根の猿が馬場乃住家を去退くよりハ昔く因て  
式野原一の美子乃行流成尋ねぬ何を燈と止ん申もふれハ既小三年余  
を燈に思ひ當る者ゆの逢がと余下小尋ねぬ駿河ある平川地村  
のややく野子を使え法を知る有急と心付神ありの巫女となりて分  
小乃 神祠を勸請し則か付し守と彼名刀を祀り納り是を愛宕の神と称  
一人乃古山侍人天物結終る善悪患病の難易其他何変ふより神小向



告進しき登しと言解しきふ初ハ信む人ありきれ掃小来りて  
 を頼む輩老女神下しき吉凶善悪を告る言毫髪夫の違ふれ何し  
 一人二人と父傳へ緒来る者日小増て幾程ゆあさる小其評判遠近小  
 愛宕乃姥と尊信し其望々叶ひ其疾病癒し輩ハ金錢米穀布綿  
 類を始心小謝物を寄附し程小難根何し未錢小吏を欠む其日と  
 安く送る然小彼狭衣が母乃小柴尼ハ門谷村ゆ何者とも予狭衣  
 を奪去香白兵衛ゆ行流され成れ深く歎た悲武藏相撲を志し  
 泣く我子乃行流を尋吟ひる此愛宕乃姥が風説を父我子乃生死を  
 一力と平川地村ある維新の留に尋未云ふより頼安之れを姥も身の  
 上引く魚良れおかり神下し占小全く命小別条方々回達日む

の昔あれバ尼ハと婦も謝物の代ゆ二日三日許姥が方お在り若火焚乃  
 を授け流流あが信どろくあれぬ姥も女悦ひ吾傷日一の神下乃業小暇  
 ありる業林小ハ手乃及びねる煩う御身ゆ子成りまるとあれを方方て維  
 妻を授け日小錯る人小心を付く妻同小自然知る使ゆあると勤らぬ  
 小柴尼ゆ寄方り身多れ是成幸ひとて姥も宿小滞留し新水乃業  
 を授け日毎小入来る諸人乃結納小耳をとらゆ合せたり扱まし吾賀嶋の堀  
 堀真秋ハ川越長藏方をまき伊豆相摸武藏小成徑二王在在所と香之世も  
 行流小尋れ何れの方知れ是よりハ上方筋を尋ん道を引返し  
 河近より小或茶店中土人三四人り合愛宕乃姥も神下小言  
 一尺高小小結るをゆら志賀藏お向ひく声を低し若其姥と申ふ



たよりく同を若や歌乃在所香之助が行傍を知使りやあつと談合し平  
川地村不到了主人の姥が家后を問ひ彼所乃林と南二丁許へ目池の辺で  
亦在孤屋こそ愛若う姥が住家なりと教ゆるを真秋主従其人謝し  
らぬ家小尋行案内乞く入を折し老女宿亦在何乃馬来ておひし  
問真秋其人を乃年八六旬余とんえ頭小解ぬ雪を頂死面小皺乃涙と  
たつと最冷死廻り扱言多ハ五ハ傷ハ深死故あまう人乃在所我子乃行  
傍尋人の二道乃け旅乃空小吟ひゆる者小侍乃御身八神下し萬乃更を昔  
あふし人乃言乃死む斯た子春ま願くハ神ふるく賜ふと悩頼  
とる老女歎息し世ハ似ゆる更ゆえ吾傷が方あの子以尋人の名  
られた貴たも賤たも子を尋る許覚束なく心苦たあハさむいぞ神下

進了せんを嗽手洗し白衣あけ社壇乃前なる圓座小座し神鈴  
把振鳴し御扱乃祝詞六根の抜ハかび声小くかぞへ結印し拍手  
あ祈念し終り頼く神前小立二本乃白幣双手小持眼茂開く申り  
呪文を唱まむん幣帛動花出し次第小空さる小震以上なる跡今  
マ神下り小す小こそと悲しく頼く真秋主従ハ息が結心耳茂傾け  
く坐居り小柴尼由納ヲ乃口小蹲居神託奈何と安耳する姥と鉤  
上まき目然少一閑た声音由雄く死乙声ゆやよ汝達我茂を誰しか  
おり是と遠江國秋葉大推現乃使もあ千歳歴さる當女乃神  
我茂此家乃姥が幣串小寄来し更ハあまれも汝達か至ある者小存死  
惠茂請し其恩謝乃為茲小寄来し汝達か迷乃雲を晴し得さるぞ



愛宕の  
 姫か宿  
 真秋  
 小柴  
 我子の  
 行信  
 占  
 園



小柴

まふた

まがら



たご

全不言卷之九



汝達が尋る者今宵此家へ来まへ。然るもあらず尋る子の中不意なく出  
 逢ふ。疑ひ感ふ。更勿き。他国へ赴き。遭期ふ。然るもあらず。禍其身は  
 及ぶ。慎む。と。比へ。幣串大に。震動を。忽ち。老女。免。目。倒  
 ぬ。絶死。が。如し。小柴。尼。心得。水汲。を。焼。を。返。り。入。り。

背を。と。お。老女。以前。及。起。を。尼。勤。水。口。契。夢。の。覚  
 る。面。色。ぬ。神。純。如何。侍。と。言。又。り。の。音。及。ま。り。真。秋。頭。を。  
 低。く。勞。を。謝。し。在。し。神。純。の。中。成。結。し。美。と。都。方。へ。尋。上。り。と。思。ひ。侍  
 下。今。宵。此。屋。め。我。子。の。回。遭。し。の。御。告。と。嬉。し。可。憐。告。し。

吾。傳。人。今。宵。の。宿。屋。に。惠。を。ま。り。と。と。頼。れ。老。女。點。看。て  
 する。御。告。あ。る。見。苦。し。草。屋。ま。が。夜。も。二。夜。も。留。り。て。快。く。昔。

真秋。斜。あ。り。悦。び。扱。志。賀。藏。の。向。ひ。汝。余。の。旅。宿。行。く。一。夜。を。明。し  
 聖。の。期。疾。迎。ひ。来。り。と。命。し。れ。志。賀。藏。の。中。の。姥。が。神。下。何。れ。も。其。意  
 得。と。し。ハ。あり。い。も。女。主。乃。命。黙。止。り。唯。と。と。と。出。行。多。速。と。直。秋  
 と。小。柴。維。根。女。門。士。と。と。何。是。と。お。結。ら。ひ。合。中。小。柴。維。根。ハ。お。歎。き。矣  
 ハ。吾。傳。の。産。乃。子。の。禰。禰。の。裡。に。別。を。侍。し。其。者。の。回。遭。し。二。三。年。の  
 程。ハ。諸。列。を。尋。る。に。い。は。し。て。絶。く。知。知。使。を。給。し。分。か。ふ。此。村。小。足  
 我。留。く。神。下。乃。巫。女。と。や。寄。集。る。人。の。中。自。我。子。乃。在。り。と。

心。成。し。い。ま。し。今日。ま。が。の。似。し。人。の。小。回。里。逢。む。愛。宕。の。姥。が。神。下。の。

世。乃。人。の。言。と。や。と。御。身。達。也。甲。斐。太。老。姥。を。の。め。某。頼。く。逢。し。神。純  
 を。ば。り。る。ハ。頼。あ。る。世。乃。候。小。陰。陽。師。身。上。と。し。如。く。吾。身。の。上。代。身。



何し知るれやもあらず 習音をもちぬ老る身の逢はる森の露と消はる  
 小甲斐及た鳥ぶら。長た恨を何る世ふ言ちるるたとあうらた語らば  
 けがたころ小柴真秋も両袖を泪の露もそが汗し扱八脚身も子成尋る使小  
 ころころ巫女と斯三人とり三人も子成尋人し吟も最も不測の奇偶系  
 さとれ上天の瞬を得む終小あのがぶる子小回會朝らるるすやうく小柴  
 真秋小あ向の互小子の逢ふ胸の周縁逢あがとまむあが暗く慰む更も有  
 こも和君ハ何國の方や如何も更やと脚子成失ひまひと問も真秋が  
 り争る斯情深くのいもふぶる何成色さむふぶら五倍八近江三河の因  
 濱名の城主槻木家乃藩中の芳賀島伊織ある者の妻あくるより一人の男  
 ういひふ人う幾言ゆる主ハ不貞を要四年余り前小行清あるとなりを

其後やと敵ありと夫を二王左門と賦乃為小討きとりぬ其者京を河波  
 小敵小住侍りし其文を討て後ハ其所を退行清去れまむ一ツハ敵乃在所  
 と知んとも二ツハ子乃行清を尋人とも小夏旅路小さるよと何心なく  
 踏るも成もゆき敵なく難根心と小柴の尻はもあつて真秋が方一膝を勧め  
 扱ハ若賀嶋乃令室ゆく在せらる吾儕ハと近江路の醒井ある阿部屋搦内  
 者乃妻ゆくをり故有て和君乃尋あふ香兵衛主小岩廣了ふ所ゆく不意  
 逢侍りたると云くの奴ゆくいと始香之助止宿せし更より使衣が死せし後小阿  
 郎屋搦内へ妻死士田ゆく死せしと思し使衣の再び回し逢吉田を逃出く路  
 次ゆく香兵衛小行達門谷村ゆく又使衣を奪はれ香兵衛由行清ますすけり  
 とと近一五十一落ゆり結り多るゆい。真秋大の小歩勢死扱八脚身が尋らる



子我子の縁おはさるればさきより小身を凋落せしめ門各持の齋たる後八面令  
 身如何ありし最覺束あふのまで先魁乃託宣小今宵此屋中逢てし  
 告之を吾儕が子も御身が娘も身お過ちりよ母なる更りやと泣きこひて結  
 あふ独維根ハ胸の裡小伊織が横死をうまう望み失ひ快くく楽されしも  
 面の色お表ま守叔も不測の名称あひ小日のいとく願ね何なりとも夕飯  
 の設りてよと小柴の尼小命を折しあま門辺お停立旅虚無僧歌口  
 調吹出と音化乃流乃一重切音も秋風お哀れさ暗頭来乃黄昏お死柳  
 無用いととらて小柴乃尼ハ勝手へまが飯の設をとり急ぎぬ主姫も立ち  
 神前乃御燈を照と切火支持丸輪寺ハ笛吹止家内乃動靜を右見左見  
 独黙首拔足しつ傍乃木三陰立忍ひぬ内ハ維根う斯もまき門



梵輪寺門辺り  
 愛宕の姫か  
 家内を  
 小見し  
 所



鎖寄。真教を誘引基所。三人食をまゝめ終。尚も互小言。残世  
 昼の終り余心。死結りつ。つとる程。風が送る。野寺の鐘。早初。入  
 報。ごらゆ。維根。尼。ゆ。ち。向。入。旅。人。ま。ま。ま。ま。疲。ま。ま。ま。疾。則。房。小。伴。の  
 御。身。も。俱。小。寐。も。指。揮。か。す。小。柴。尼。唯。く。て。い。か。少。く。と。勸。ま。す。真。教  
 一。回。入。く。尼。俱。小。暫。時。の。夢。を。結。び。た。る。迹。小。維。根。只。独。子。の。思。り。を  
 傾。た。吹。る。烟。草。乃。煙。さ。結。び。た。る。ま。ま。び。た。戸。乃。板。間。泄。夜。風。の。燈。眸。く。折  
 一。の。あ。ま。か。心。ち。の。戸。を。滅。禪。と。踏。破。了。雲。衝。む。り。乃。大。漢。突。然。く。く。入  
 道。入。来。了。維。根。前。小。跋。扈。小。荒。木。造。の。二。王。成。だ。並。立。る。如。く。なり。されど  
 維。根。ハ。些。の。強。が。ず。二。人。を。静。小。さ。又。り。く。汝。等。ハ。同。じ。と。ま。死。偷。見。あ。る。ぬ。

こそ多ろろ小。愛宕の姥が宿へ押入。八世の薄命ある者。いゆ。女。ゆ。ゆ  
 手。成。動。さ。目。乃。前。小。辛。苦。を。凡。々。を。命。死。で。疾。罪。を。謝。く。去。ね。と。煙。吹  
 あ。か。ろ。云。々。れ。二。賊。肩。成。あ。ら。て。呵。く。と。咲。ひ。此。狂。波。女。何。成。り。や。我。徒。と  
 何。と。俯。目。せ。り。是。と。関。乃。東。小。童。ま。ま。と。少。懼。し。二。王。左。門。殿。乃。群。小  
 四。天。王。の。称。ろ。今。年。慶。乃。姪。念。高。眼。乃。五。四。六。乃。豪。傑。よ。謔。言。吐。を。と。り  
 女。死。く。汝。が。虚。妄。乃。神。下。ゆ。思。民。を。欺。た。貪。濁。金。錢。囊。乃。底。と。叩  
 ぬ。く。差。出。せ。よ。あ。ん。を。皺。腕。踏。折。く。さ。い。行。ん。と。唇。舌。可。た。く。罰。と  
 々。れ。の。維。根。ハ。空。吹。風。と。や。わ。り。各。小。あ。ま。れ。を。兩。賊。大。の。憤。つ。納。戸。を。目  
 掛。く。行。ん。と。維。根。ハ。胆。の。こ。ま。の。く。や。女。乃。搔。き。先。小。ま。す。高。目。乃。地。の  
 際。片。手。小。扱。庭。の。唾。と。投。ち。た。れ。姪。念。頗。る。強。た。あ。が。く。ま。や。物。乃。死。狂



波が腕立ちふ。と拳成固め、撃くうろを。維根早く身をころへ。姪念が腕を  
 うん捕らんとて我ちと投付る。先にお懲りと高目乃五四六刀技取切。うろを  
 念も起上り。大刀拔放し。只一討と躍る。維根逃るも怖る色なく。早く  
 社壇の幣おとり。右より斬を請流し。左の切を拂ひ除。上下前後の纏る早  
 業波上乃燕小異あり。終小二賊が大刀お落し。幣帛振はく。追立れはけし  
 も強暴乃両賊も。老女が奮勇の恐怖し。己が蹴破し。門只喘く。と逃げ  
 々々。二回乃内小真萩小柴。強がれ音小驚馬を起出。透陰より以光景を  
 窺ひ入。おお冷の主姫乃勇壯やと驚歎。尚息成結く。動止を窺ひ。此  
 時又門より。大乃漢長た大小を佩こり。緩く入来。維根小回ひ。鏡結せ  
 んと。うろを。主姫乃面を位と。大乃驚馬。俄小身を遊。脚身ハ我母より

在る。斯も知い。先小賊も。無礼乃狼藉。今更中。謝る小切。ハ  
 只仁免を願奉り。と首成低く。罪を謝。多小と。維根も面をおか。て  
 赤鷲馬た。おろし。汝ハ猛丸。おろし。先乃偷見を小賊。と。上ハ東海東山。兩道を横  
 行。不義乃貨財を掠。人民を悩。二王左門ハ。汝が更なり。多。うろ。ハ  
 更親小不如。の古言宜。ある。れ。継祿乃。裡より手。の。掛。養育。又。母。拾  
 ち。逐電。たる。無頼乃。孺子。とも。人。を。成。る。あ。ず。と。亡。ま。り。り。  
 言。の。果。々。物。堂。の。群。小。入。清。廉。乃。又。か。姓。氏。を。と。小。機。ね。る。不。孝。の。汝。世  
 乃。為。人。乃。為。小。今。捨。と。殺。と。捨。た。れ。れ。も。替。時。罪。を。宥。て。回。更。あり。汝。先  
 年。三。列。濱。名。乃。城。主。觀。本。英。列。公。臣。若。賀。嶋。伊。織。ある。者。を。討。つ。退。し。と。向  
 左。門。中。に。扱。ハ。委。し。く。知。食。々。の。俸。と。と。云。の。義。ハ。付。妻。實。を。討。つ。と



退いと彼祐明が幾嶋をつづみ使つかしていり龍りゆうをを奪うばひられよと頼たのむこ越こす二件けん及及び幾いく  
 嶋しまが物もの緒いと少すくく又また清きよ色いろが死し亡じやうせを知し祐たの明めいが頼たのむこ幸あはひに内うち見み使つかと成なるは濱はま名な城じやう  
 へ入いりしふ。孝たか實み嶋しま見み頭あたまさる水みづ道みちの術わざ少すくく難がたを免まぬれに伊い織お小こ太た寸すん  
 付つし追お戎えい緒いと少すくくちちより一ひと回まわり。真ま教きやう八はち怒いかふ堪々たつ。用もち意い乃の懷な劍けん抜ひける。走出い  
 んこももふ驚おどろこ尼に是こは何なに更さらと支さゆら成な梯はしの除のぞけし障ま子こ引ひ開あけし乃の仇あ逃にげしと  
 左ひだり三さん門もん目めけつ撞つくを。二ふた王わう早はやく其その手て戎えい扱あけし拾ひろ伏ふせし朝あ笑わらひに女め乃の身みとて我われ  
 を射やんとし可か笑わらさよ。乃の汝なんぢ何なに者ものなりとなりを向むかひて真ま秋あきハハ刀たう恨うらみを身みを  
 あせれも身みを動うごけし得えずし滿み怒いかりし終はりし無む念ねんの涙なみだふれれり。誰たれ扱あけし  
 くも笑わらふ。其その女めを汝なんぢ射やりし伊い織おが妻つまよ。汝なんぢを仇あとし祖そとし先まの物もの緒いと少すくく祖そ  
 知しり。其その時ときハハ三さん王わう左ひだり三さん門もんとら六む我われ子こなりと六む知しりを夫おつと乃の仇あを他た人ひと殺ころすし

しかり悔くふをせし其その妻つまを我われ手てあらけし夫おつと乃の靈たまを慰なぐさめし行いくを解とけし百ひゃく  
 ちを殺ころすし。流ながれし左ひだり三さん門もん木き小こ悅えび。扱あけし人ひと質あつちの手て入いりし。此この女めを解とけし釣つ寄ぎ  
 ろ者ものをあれとく門かど向むかひし。高たか目め今いま存ぞん慶けい。此この者ものを縛しばりし吾われ隱ひそ家かへ曳ひ行いりしと  
 呼よべし先まに逃にげし二ふた賊ぞく怖おそろく。這こみこみし用もち意いの繩なはを取とりし真ま秋あきを高たか手てより  
 縛しばりし上うへにし。猿さる喜よろこぶをせし。誰たれ根ね左ひだり三さん門もん別わかれを告つぐ。何なに國くにもなくし曳ひ行いりし。小こ  
 柴しば乃の尾お二ふた間まより此この体ていをを々た々た阿あ歎なげけし。奈な何なにもなくし更さら能あたはず。我われ身みも如何いかなるか  
 辛くる苦く小こ遭あふしと戦たたかしをを頻しばしば多おほく。誰たれ根ね左ひだり三さん門もん向むかひし。汝なんぢ伊い織おを射やりし得えずし。昔むかし昔むかしの  
 罪つとを償あまり不足たりず。此この後のち母はは子こ力ちからを併あひせ。槻つき木き英えい列れつを亡なしし。仇あを復たがへし。今いま汝なんぢを隠かく  
 家かハ何なに國くにもなくし同どう小こ左ひだり三さん門もん各おの々お々お。其その伊い織おを射やりし後のち徒た来らりし。阿あ波はが嶽たけを立た  
 退の遠とほ列れつ秋あき葉はの山やま真ま小こ移うつ住すみし。小こ賊ぞくの中なかに彼かの伊い織おが男おとこをを知しる者のいひく



搦捕きしよりいふは是も又か仇の余類をぬき釣上り衆賊を突殺せしめいふ不測  
あるは渠者勿しう懸生し。其不突くるをぬきい何程の更りある人一鎗を刺殺  
し捨んと鎗を合せし処案の違ひ敵の勇壯當りて逆も勝がたを知  
謀を以て討んと鎗を拾ひ退れし渠早く七首を投ぐ我右腕をち  
貫たし今ハ殊敵しと。無念あざ山井の船入習ひ得し妖術か身ハ  
免る更を得るれも頼切する手乃者渠渠の悉く討て捕をさく焼きた  
れ身ハ孤独し多りて立寄方あるれを諸所方ハ漂浪するうち針を先の  
二人の四逢安し力を得る。九子の釋乃扁辺ある廢寺を捕し再堂  
を結び英列の冠せんと思ひいふ。右手の金瘡痛を強く働た自在あるごと  
れを言甲斐なく村落を徘徊し。繰り銭財を奪掠め衣食の料を

い乃と然不今宵討らば母の回と逢参せし更宿望達と死時節到來しそ。  
将す不審たハ彼多賀嶋が男乃其腕ハ一短劍を抜とりてしりん  
いむ。阿呼乃梵字成彫り。其あ幼女乃砌又手は多此梵字成紙の書  
し。是ハ我隠し銘かり汝成長る後鍛冶あるを此銘を免しんと宜し  
尚耳庭中残る。若汝が制作る或ハ余人の身ハ此銘を彫り鍛冶ある最  
覺束りし。是覺せし懐中より帛小巻する無鞘乃短刀とり出して刃を  
さし。維振太の教書なり。忙しく手を取り。ささる眼を袖りと拭ひ燈をい  
たる折もあれ。門辺より一人の武士喘く。走り入途中より狼藉者ハ出會  
洗小及い何処の。何事少時くやみ。あがりいひて席上へ上り納すの  
方へ行んとす。二王左門上へ首く声厲す。汝腰小両刀を帯か。狼藉者





愛宕の姫  
二賊を  
討つ

五四六



金石



怖ろしむ人乃居室へ泥履を脱ぎ去る。是れの本を待たせ馳上りて希有  
 白痴者かきとて引居る哉。維根何心なく顧み此武士の面をみたり。汝ハ正しく  
 先年夫清包を欺り迎へ飯に英列が使者ありすやと答むれば武士維  
 根が面を刀で仰天し再度門へ逃出入と云ふ事。左工門早く左手を伸し  
 ぐ給元々の狐席上へ倒れ投付れ。維根短刀をさし置き置き置くと手早く世流縄より  
 来りて侍の武士を強く縛り柱の下へ引とく。茲に菱賀鳴香兵衛  
 ハ秋葉を出し其後の秋葉を葛籠小袋に詰めし。解足を負つ。播磨守之助が行  
 傍を尋ねと緒所を往歴し多々。今宵針らす伊沢丹平の行會を捕へんと  
 一々れも。伊沢早く振切り逃走し。バ何國やくりと道行し其身被衣を  
 肩に思ふ程小走り得む。遠く追後喘々跡を蒸れ。幸ふか月夜小く道先

遠くを走り。慥に伊沢が逃し。野中おさる狐屋を目的として走付り。道より  
 へん。何れも何の故か板戸破き家内にお丹平を至り。光女縛りけし。燈乃  
 影お見えたり。天乃助と大い悦び。葛籠を中へり。門辺におせり。家内にて  
 立入つ思ふと二王と面見え令せし。仰天し。汝ハ二王左工門ありすや。秋葉乃山中より  
 死し。人と思ひ。尚生延く。茲に在る多し。いかに常小勝負を競ふ。このも  
 果てに二刀見ると。被放ち。八州の揮抹せむ。左工門の口より。左手の刀拔持。汝よく  
 茲に来たり。お小賊む。の仇し。山寒を焼盡せ。臍子恨の鋒身小見。お  
 呼り。両雄い。進み。右結左拂。切結。維根大い心を焦燥。兩人去る  
 圓の手が。おろよ。一言。おま有と。支の。西人の耳。おろよ。手。猶秘術を盡し  
 ぐ。お合。左工門。手練。香兵衛。及む。上。お。右手。金。左。手。小。銀



を揮つとあれは自ら刀法乱れ今斯くして是を兼て案内や足ぬ人二王  
の闘あがう術は甘退し忽ち後まゝの庭へ起下り身を縮く池の中岸破  
と飛入り汝女ハんを成ゆり香兵衛も降り飛下るんとて誰根早くその  
帯除き取り取留右腕の金瘡有る働た自在あるが左エ門討取は真入  
勇者乃本意ふあれし手疾平癒せし上ゆく漢く雄雄を決し且二王毎  
乃吾儕が御身小回を二條ありと支ゆる老女不側乃姉力香兵衛大いおと  
焦燥子を時乃妨あるを先沙う討殺せど懼お揚る白刃を怖まず其仰  
ハ理ふが渠不側乃術を傳へ水中入時ハ姿を消し目も隠し既秋葉  
乃山乃井小投せしを以て知り尋常乃勝負有連ハ吾儕を人質くわ  
乃期を延してよむハ先ぬれ左エ門小あけり此短刀ハ御身所持く或ハ

人より買取むけりつまをりして差出と短刀香兵衛と一見是ハ故ありて  
幼推の時より身を放さぬ我守刀先ハ左エ門小あけりつと落れし誰根又  
同中並ハ御身ハ多賀嶋の血筋ハあつとつ小此方も最縫子いりあり  
親母が物語小纏裾乃内小此短刀と俱小握れ多賀嶋乃娘子とつと趣ハ幼女  
乃時小多し御身何乃為其本末を戸るやどり小誰根ハ少驚死件  
乃短刀取り早く腹ふさぎ突えり香兵衛大い驚死左エ門ハ金瘡の手癒  
しと追入質しとと誓ふ何乃小自害せしやと責問む誰根告げあり眼  
と開た香兵衛が面を借刀々泪を流し文清包主が面が小似し上小覚有  
額乃黒子小大く丈と知れ世小す此者も沢ぬれ猶も疑ひ惑ふ此  
短刀も小据ゆり六廿余年が同尋慕ひ吾儕の産の子りハ御身あり



有々るぞとりの丹度驚く香兵衛立少元も扱へて一回の内より走て出老女  
 を勞り抱す香兵衛其面を忍び思ふもや被衣が母の即身も此家の在  
 るるをさきさき言て門辺多馬鹿を思ひ狭衣の立出まて今母乃自れ提  
 正付を引く親子再交明を逢嬉泪ふれゆり香兵衛愁傷の泪をかふ  
 手肩を勞り言畢して我の年来又母を慕ひし思ふも脚身が母を  
 在んといささか付く脚生害のう不審ゆいと向手肩を息吐其不審理りの  
 筈れが廿五年乃昔結大略結正世せん使い夫六平二乃厄乃歳始く吾侪脚  
 身を産し厄年乃子の且捨るりひあり隣村ある男乃幼少抱ひ親  
 ハ其男が頼り産むて幾日おまがる脚身此短刀をそく五浦村乃土神の前  
 小拾置し何とく久彼男の抱ひよ飯了ハ我子ぞと短刀の品置ハ

杜丹塗る鞘ある備前物胸の緒乃書付ハ應安三年七月廿八日の書日つけ  
 何國の雜子とも知りあはれは夫はあが狂気せし日乃遠近の村里  
 を尋すの回れど終ふ美子ハ行湯たれど尋し思あはれ取違へ子哉  
 我子とく育上ハ彼左五門童形より心荒く父の業を忌嫌ハ山猿川狩或  
 ハとて劍法角力の外を家と果ハ悪友の誘われ道唯口論ハ之を更なり大  
 禁する傳葉を好親乃物他人乃物を奪掠る悪行成長小隨ていづ増  
 長もれ申も人なほ死者あはれ勤當せむと思ふも流石義理ある人  
 乃子あれば久離も切得む夫婦より或ハ北里或ハ宥ち手成盡く辛辣  
 ども空吹風と吹流し終ふ十七歳乃秋の頃老る親を振捨て行湯知  
 ども成し小付又美子の更を思ひ出言出さふ日とてあはれ神あはれ身



ろ思ふぞよ我家へ度々来通ひし伊織全の拾ひし勇まゝ死武士のなり  
 と有んと其後不意槻本英列様が馬場の家居を過りて吾儕の木  
 を剪居し鈍の鏡をえりて夫清包が刀鍛冶ある由を察し家城小將て飯  
 平く劔制作の義を死にたる我丈八身を亡すと媒なりともいささす快く  
 肯ひ飯平の精神を凝りて劔を鍛えたり。槻本家納まりの四五日と死く又  
 迎の使者来り納り刀夜毎悲鳴の音残毀し止む急死来り  
 悲鳴を止むる鎌目を切ひと言ひ彼処縛り武士く丈八何の心もはさず  
 使者と俱小家を出し如何なる度也絶る飯平守數日立後門辺を  
 過る旅行の武士二人鍛冶清包八槻本家の呵責の爲に死せりと高色  
 小結りのく通るもの呼笛子細を向む英列ト者乃言を信し清包

小結りの科と肩せ終ふ多賀嶋伊織不責殺させしこの風説ありと結し  
 守せし其時乃吾儕が胸の朽惜さ八張も裂るる思ふもその一人は槻本  
 主臣を討得人更安き守何卒美子や猛丸の回と會し更を謀んと狂女と  
 成る三年余り都小吟八副を要し百年千若を凌ぐも回王達のバにさす  
 く又母の家不在時覚る孤寄乃法を行ひ神下り焼となりて賊空し  
 赤がく日と母小人を集りも脚身乃行清を尋人乃も然る小今宵押入と赤  
 偷児乃首領乃二王左門面を刀をぬる家出せし無頼乃子猛丸めく祐明頼  
 を幸ひ濱名城へ入込る多賀嶋伊織を討つると其折々の一五二結る  
 皮て焼く胸乃火火を冷せし小結りひさすや伊織美我子を育てし息人つ仇  
 一担英列の美子の爲に相傳の至君も在り六世も叶ふ後仇討つ夫



へう操をとも後ろ親を親とこそ御身が刃のく自害せし及討めまはる心ごと  
 深手も屈せを長く始終を物語きむ小柴も授衣の心根を押し量りて月  
 の嶺を色成放つてよと泣ぬ香共清の悲愁の泪をともちるの我身許せ親子の  
 契王薄た者へあはれま乃又後の父俱小非命お世を去りひ適回を又逢ふ  
 父乃母ま我刃伏しぬ我をく不孝の名を世の人の縁せまふあぢ死な  
 らにありあう不審た主君英列公を先へ兼又伊織の一向の仁義をろ  
 昔く罪の疑れを睡れぬ獄下し人あふ守但し先年及物舞  
 小君殿脚不真を受ひ刺逐電せし伊沢丹平王家の使者と成  
 く又清包を迎へ故り更其本末分明あ守ひと推問く邪正を糾ま  
 んと掛お般系れ伊沢が辺り寄如何小丹平沙亦好悪あ若殿始め

某が漂浪の身とせし上六九一命助るく我又清包く不良死乃本末及び  
 祐明く邪謀の條逐し白状せむ其功不免く一命我助得せ人疾物給れよ  
 とせりまはれも丹平は五嗚れ我曾く若殿及び汝を漂浪とせし覚あ守況  
 佐明王不隠練の企有やりや露許も知死やうあある余人の向ねと取敢す香  
 兵清大りお怒り汝此期小及人猶妄言と吐く何を信むれば好く白状すつれ  
 やうこそあまこ腰刀を鞘あう抜りつ伊沢を背おけしと縛り上る兩腕を  
 抜り許りぬれむ苦痛のや堪がり人白状せん緩らるへし流る小より香兵清  
 手成あう人残らず白状せしと推問る丹平や青息吐原我何妻と  
 も知どと虫朝華ふる錢嶋岩洞祐明主乃企の守り搦殿小泣酒をこく免  
 花魁を質ふ身の價の香炉を質入ると詐る白山が千の渡し御身を帷を



ついでに園封おせせしむ皆兩人討らひなり其後主人上京有る付幾嶋亡  
命せし故我も連座る難を避る令俱に逢電し身も寄命を終幾嶋  
小随ひ神明主乃食客に成る然る小祐明彼清包が制作の刀を惘望あれ  
ども承引が身を道恨小思ひ幾嶋を度具迎て清包が熱望可船手討ら  
猪塚栗林を以て清包が横死ハ英列伊織が業をりて流言させ且二王左門  
を捕らむに龍巻丸を奪はせんと支破れり左門池中の龍入剣を投り伊織  
赤付の幸ひ刃を抜方々体ふりり却り伊織を刺殺し其後英列公日  
影を忌患病を發し政勢を祐明の預山館に移り保良有るを祐明より  
医官奪取小毒薬を調合させ英列公の勅をせし小患瘡小く面貌腐爛  
とて魚尚存命あれむ再び刺客を令て寝首に掻せ逐小槻本乃家督を

押領し其時相續き各人と言觸りて掃大殿乃行傍を尋とせ其大ハ鉤よりて  
刺殺せんと巧む將ニエが伊織小疵付し短刀を刀と左門ハ祐明ハ洛能なりと  
知事出りて世嗣とせん是亦暗小人を分る在所を探り此皆是祐明主の心  
術より出る所なり我徒の預知まふあす斯白状せし上六約定の縛を  
解く助飯しめると同ぬ支をまき言明し只管香兵衛小媚縮ひ己が命以寄れ  
んとして法統多難根公苦痛の中より伊沢が白状を授け祐明が及回ありて買  
嶋王従はま乃仇ハ非なりと再び殺す心う後悔香兵衛ハ相傳り主君の  
横死の恨を承へま又も祐明が手小死し國家をまき押領せしれと度々度々願勝  
を孫無念の泪怒の泪両眼ハ熱湯乃滝を流し手成咬を握りて何思えん  
はと身を起し走出んとして小柴乃尼忙り推留り今乃白状をゆえ怒りよ



耐も走出る六濱名一行く祐明を討取んぬ妻もふれぬ一人く最危し先  
 心を鍊く変を謀りんと宿めつ。香兵衛が差添拔より早く胸の辺りへ突き入れ  
 る。彼衣がかりより香兵衛も強た惑ひ脚身もまき自害に有ハ物小く狂りて  
 り。小雅根も才致奪た故にそあふと妻向かて厄ハ苦し死息成吐今丹平とやう人  
 り言し。賊首左三門が又ハ祐明産する母吐しや北尼あし侍るごとく斯の云  
 りハ不審玉ハハ懺悔の爲ハ大略始し侍りハやう原吾傍ハ猿投村なる内野作  
 て。若の娘少く。祐明主の郎ハ奉公せし彼人酒具の戯まき。吾傍を強て困死  
 小誘ひり。小川深ぬ宿を宿し。今室の妬を憚り人おれど郎を忍び出せ又窮作  
 し。終合の上。藤川に里ある伯母の身た忍び産落せし。男子おが。如何あ  
 更や乳汁出せ入おやう。ハも生れし。庚申の夜半あれど。賊ふあう。の俗言と

思く取敢人もあらず。経しとあさ小祐明  
 手より乞得る短刀をそと捨てる  
 小取違らぬ。此宿乃。至乃。恵小成長お  
 ぐる。恩義ある又母を捨。山家の長と  
 成し。悪お祖又窮作が。大恩受し  
 榎本家小冠せん。伊織主を切害せ  
 一極重悪人。鉄も我子と知やう。喰  
 付てありとも恨も。人小。主姥が。末期乃  
 物結と丹平が。白状小。幼く。知る。左門  
 か。素姓祐明乃。暴悪何世乃。因果乃。報



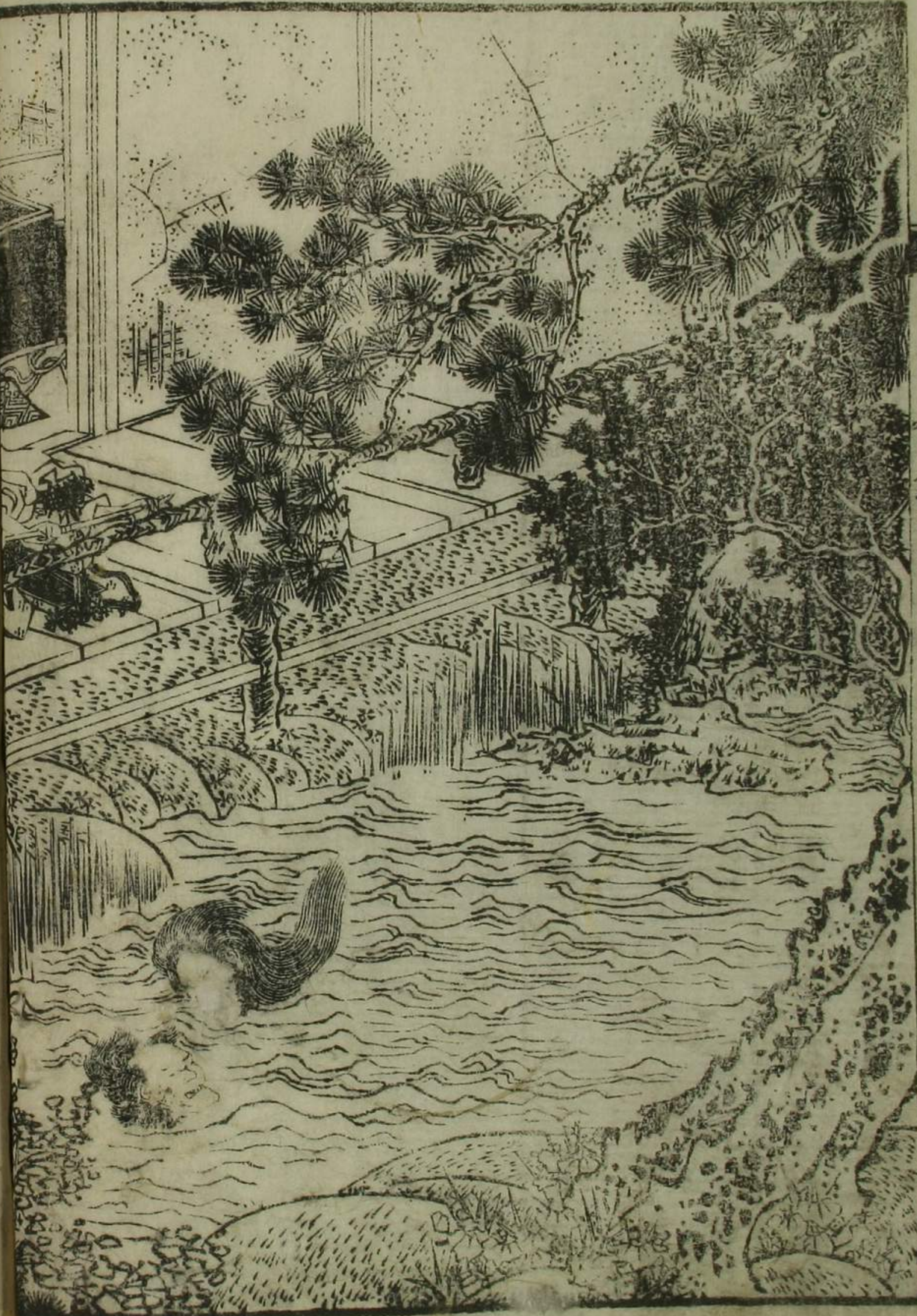


来りたる悪人の契り成りたる悪人を産より久し遮莫杖徒衣の祐明が種ハ  
 たるす其後阿部屋掃内が後妻となり二年立て産一子あれは腹ハ借物  
 宿異なり如何ある縁や脚身を急ぐ。此年月の憂艱難哀と思しと毒  
 とも侍女ともなるととくしと苦痛の中の中手成合香兵衛を伏拜せれば杖衣  
 ハ母を取とがりつよりある急路ハ踐送ひ去る辛苦を見せ進せ不孝の吾儕  
 をさるるとも愛しと母脚の慈悲のせぬ世より及し侍んとて手負を  
 勞り泣沈む手負乃維根由哀涙みせながら歎息し扱ハ左門が夫の母ハ  
 尼公由と有るる夫と云て我宿の面世れり自然悪因の茲ハ寄集ハ  
 之前業を果と編や有るるとあり付く氣にハハ宵を止宿し香兵衛  
 後の母左門が連累の二賊が為縛られ隠家へ曳行れたれど人賃り

て釣寄る者有るといハ命ハよも過ちあり手段を圓り海に及せよ  
 半波より香兵衛又驚た何と母賊手ハ虜となり玉ハ一もこの賊ハ隠  
 家ハ何國の里のいやとせせせと向折のあま門辺の方より真萩が声  
 あり其隠家向まぐもや吾儕ハ疾より茲ハ有と呼けけ志賀の藏造へ  
 立入られも香兵衛始り二人の手負使衣の是はく行ゆく其恙を死を脱たり  
 香兵衛真萩前ハ低頭し別後乃素情ハ先きも死不審りたハ宵乃程賊  
 隠家へ引えられ玉ハ承るといハ如何とて遁まハハ向を志賀造  
 引取る僕令室ろ仰お隨ハ街道筋の逆旅屋ハ止宿し赤侍の何人  
 ともあれ枕頭ゆり今汝の女至賊難ハ遭く門辺を過ぎ疾起出く侍よ  
 と呼けけい友お驚た起いハ吏小人影ハ見えず扱ハ夢ゆと枕付を



藤原小茶共小  
 自害く往事  
 真秋香天清  
 秋衣志賀之職  
 之再會  
 之因





又呼覚をさし以前のてく。己の三度及ひのハ余りか怪し。宿を立出塚家と  
 さく。絶糸の果々二人の偷児令室を縛り。来り小端なり行合ひ  
 一刀を抜り。先かきさる。賊を切し捨ひひ。今一人の量熊頭。賊がを抜り  
 七八合寺合終小言甲張たなく。廻行ぬ。より。今室の縄切不。死動止をたづの  
 奉る。愛言。姥と名称し。仇敵左三門。母めく。彼三玉左三門。不斗姥が好へ  
 来り。母子の名称せし。斯繩目。唇小遭。り。肉物籍。天の助と殉。一  
 て再ひ。塚家。来り。家内。の動止を窺ひ。思ひ。ゆ。ね。老女が自殺し。の。年。来  
 尋る。脚身。も。塚家。小居。を。深。た。故。田。有。ら。ゆ。と。女。王。と。共。木。蔭。の。忍。び。二。人。の  
 手。肩。の。脚。物。籍。伊。次。が。白。状。を。具。小。立。は。一。警。小。不。耐。は。と。垂。細。の。款。を。演。し。う  
 だ。香。兵。傍。其。功。を。賞。り。若。汝。が。働。ふ。も。人。を。母。公。を。も。賊。む。小。書。で。れ。遺

恨小遺恨を重のあゆ。と。助。を。い。せ。り。と。只。音。の。感。賞。す。真。我。香。兵。傍。小。向  
 ひ。主。の。老。女。と。ひ。尼。公。と。ひ。義。小。迫。ま。く。自。殺。有。も。汝。の。功。を。遂。り。ん。の。情。何  
 の。親。が。愛。著。の。絆。の。縛。れ。が。づ。死。縁。左。三。門。の。縁。の。鬼。も。種。異。あ。れ。何。久。若。一  
 人。扱。衣。と。ん。を。妻。と。り。鉢。明。三。玉。を。封。り。て。若。殿。を。脚。世。の。汝。も。若。賀。嶋  
 の。各。迹。相。續。せ。し。余。と。り。ゆ。と。香。兵。傍。頭。を。依。り。畏。も。多。年。育。恩。の。母。公。の。脚  
 約。の。切。り。る。尼。公。の。自。殺。の。ゆ。え。扱。衣。今。日。り。某。が。妻。と。り。三。世。の。契。を。結  
 ぬ。人。逢。の。雲。霧。を。解。き。姫。日。す。る。愛。母。俱。小。来。共。弥。陀。の。引。精。小。就。九。品。の。運  
 け。花。の。臺。小。座。と。く。不。易。の。快。楽。を。極。め。此。共。神。乃。脚。教。子。始。か。り。男。女。乃。和  
 合。幸。ふ。り。社。檀。の。神。水。交。妻。の。因。り。土。貴。則。ち。尼。公。小。契。約。の。義。を。愛。す。ま。り  
 死。後。水。と。出。音。の。母。真。我。昌。を。と。り。二。丁。と。は。香。兵。傍。兩。手。小。押。頂。だ。つ



半飲く授衣ふさせむ。始の情母の慈悲嬉し涙と照しよめ。泪の露をくも  
 添く面を白く頂々。顔八照る。八紅葉楓紅葉乃それゆゑ。血汐の沫る  
 手合せ等む小紫が末期の安面。維根も完全とす。突天似合れた文也。書也  
 されと維若の所為ゆめあき。一旦不真を受く。香兵衛一個の功を遂げん。浪滄あふ  
 飯赤の道あまん。婚儀を祝を印し。成功の一品得させん。浪滄あふ  
 這奇つ。社檀の扉押開た。白木鞘の刀と一封の書取取出。香兵衛のすけ  
 日や。是とと御身の王家納め。龍巻丸と封鏡日作。雌竜丸の刀。吾修年  
 久し。秘藏と故田ちう。此女小季。記置ね披見。若殿の奉り。中  
 命し。香兵衛畏と押頂。封し。續事一遍。潜然と落月。鏡  
 八美又尊。靈名刀二口。制作有る。一尺吾小賜人。為秘置む。ひら。ひら

胸の鏡子故の園小影曇。正あは事を思させまのせ。おのれ我身の不孝也  
 るをり。暮ひむひ。父の生前ゆ。見奉らざ。社及くも遺憾あり。是志り。おのれ  
 辨明が所為。おのれを頼。白髪首を此刀小貫。七君及ひ。類又美又。又憤怒と  
 暗し奉り。血祭の斯く。縛り居る。伊沢が首。拔手ゆ。斬落  
 とし。希代の。剣希代の。手練。あが。爪をきま。り。ことな。守。然る小帷  
 した。伊沢が首。庭の池水。小龍。活る。如。眼を見。用水上を。轉廻。る。あ。を。人々  
 あ。や。と。姪。あ。難。根。も。よ。う。ひ。出。て。仇。と。見。取。る。刀。乃。奇。特。ゆ。生。気。尚。切。有。り。残  
 る。ふ。こと。彼。眉。間。尺。之。念。首。小。面。を。仇。を。復。せ。倒。れ。あ。ひ。五。指。も。敵。の。合。類  
 ころ。渠。う。首。咬。爛。し。慈。を。報。ゆ。人。と。云。つ。阿。咩。う。短。刀。拔。け。り。背。り。首。小。推  
 當。両。手。を。う。け。り。か。り。比。し。首。切。く。同。く。池。中。小。躍。入。眼。を。瞶。ら。伊。沢



有哉追回水を廻回を池の液を立證だ二巴小紡佛より斯く維根が首終  
 小追付よりしんえんを心ち伊沢が首の鬘りを引加一揮ありて諸共小池  
 の底まで沈みたる後世小到り此池を焼が池と呼するも斯く更より号し  
 成をし。真秋主従香兵衛夫婦も此光景を刀々深く驚歎し小柴の元  
 を顧み是も早更切景より亦今更う狭衣が軟を骸の植まるとして泣を  
 真秋以下種々練り二廻が戸を池辺に埋め各泪の手紙合し。出離生死頓  
 生菩提南無佛々々と稱はく此上八金谷ある川越長藏が家居あり主  
 従復仇の商議せん。平川地村を立出き早東雲の空明より雲小峰  
 ゆる富士の峯を跡ふ刀々として親子主従金谷をさしてと名心たなる

繪本金谷石罈後宮扇卷之四畢



